

槐

かい

岡井省二創刊

平成20年4月号

平成二十年四月一日発行 第十八巻第四号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第一〇二号 毎月一回一日発行



冬の陣

高橋将夫

凸凹を雪が均してくれにけり
寒鯉と妙案一つ浮かびたる
冬霞奥まで見えてをりにけり
体だけ冬の日向に置きゆくか

けがれなかりし冬眠の蛇身かな
メール打つ女とぽつぺん吹く女
冬の日を紡ぐごとくに母をりし
月凍つるしじまの中の御輿蔵
冬帝の陣を張りたる関が原
迦楼羅炎氷りつきたる夜なりけり
雪を掘る土と緑の見ゆるまで

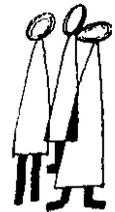
槐安集

水野恒彦

黒潮の大き蛇行に年迎ふ
福寿草りんりんとして妹背あり
千里来て白鳥の白足りてをり
月光を深々と入れ滝凍る
鐘韻に鉄の香のくる枯蠟螂

延広禎一

鶴首の壺より出づる淑気かな
海一粒とふ天日塩神の春
寒堆肥地球の中は燃えてゐる
狐火のやがて曼荼羅模様かな
僧林を出でて葱鮪の夜とされる



加藤みき

寒牡丹薦に何やら動く虫
まん中は天空に開き冬の虹
切株の洞に冬草あまたなり
切干しとダージリンの缶飾り窓
大寒やふくらんでゐる枝の先

石脇みはる

香煙をまとひし導師冴返る
大空に干菜の列をなしてをり
土筆野ににこにこと母すわりたる
かいつぶり夕べの川の深さかな
出棺を見送つてをり梅三分

中島陽華

子引日や讃岐藁座に僧ありき
寒の入人と云ふ字の鯉二匹
千本餅つき宝前の五円玉
瀬戸もんの重に数の子手が笑ふ
丑紅をつけて舞坂漁港かな

栗栖恵通子

一月の天狗の鼻を拾ひをり
鏡台に祖母の笄しづり雪
きさらぎの蒼き仏にあひにゆく
大寒やあけぼの色の貝の紐
掃きだめに母を忘るる寒鴉

竹内悦子

清荒神
影向の榊あり大年の鉄斎忌
翁面に見られてあたり猓枕
海中や平成二十年の初日
鼻先に絆創膏や初句会
天からの手紙か雪の降りつづく

大島翠木

大年の白葱二本を刻むかな
そこらじゆう阿久悠の雪降りしきる
千両万両綺麗な嘘と知りながら
七賢人の覗く寒鯉揉み合へる
寒月へつつかい棒のしてありぬ

雨村敏子

シーラカンスの鱭の八方初御空
裏白の振れも五日産湯桶
初笑こちら伊勢みち通りやんせ
竜天に登るや墨池に油渦
X と Y の 関 係 春 朧

本多俊子

ぼやぼやとしてはゐられぬ嫁が君
青空をつかひきつたる子の日草
楳の紅に魂ありにけり
寒林に来て新しきこと思ふ
鉛筆のかすかなる音冬ふかし

小形さとる

去年今年蛇口の漏れを閉めに立つ
三ヶ日犬の吼えゐるばかりにて
姐さんと行き違うたる三日かな
リハビリのスリッパたちの四日かな
人類^{はちから}よ冬眠これを致すべし

天野きく江

冬木みなあかき芽を持つ玄武かな
体より毒素抜けたる実南天
大降りに浮きたるままの鯨かな
ふつつつと底より音す眠る山
如月や微量の人口酸素足す

槐市集

十川たかし

松過の店さき濡れてゐたりけり
壁面に花咲くごとく冬帽子
新海苔の缶北斎の波頭
終点まで来れば雪山眼前に
紅梅の下から上の道に出る

醍醐季世女

ビルの間より朝日昇りて年新
友と逢ひし穴八幡の初詣
「お先に」と駆け抜けし子らまゆみ檀の実
人日の並びてをりし弁財天
好日や東海七福神めぐり

竹中一花

鵜の樹に千歳の春の匂ひかな
メビウスの帯のかたち寒の風
冬鹿と並びて塔を仰ぎをり
寒の灯に夜半の工場の機械音
事務机にはなびら餅の一つづつ

谷岡尚美

小白鳥鏡の湖に着水す
鳩のこゑ淡海の暮色深まれる
妙りかげん照りかげんよきごまめかな
弾初やフォルティッシモに曲終へる
紅梅の蕾初日の書道展



谷村幸子

涅槃西風あきずみでいる山の巒
淡雪の羅漢に会ひし嵯峨野かな
信貴山の戒壇めぐる三日かな
鏡餅戸のしまりをる乾蔵
師の色紙額に収めて歳の春

寺田すず江

大旦祝ふ海驢あしかの笑ひ顔
華やぎし声に越さるる七日かな
大寒やひらひら返る熱帯魚
天網恢恢早梅に翳りあり
鳥の糞拭ひて四温日和かな

富松寛子

父母ありし日の美しき伊勢参り
火の山に眠る大仏初かすみ
熟寝せる雪の伊吹の荒御魂
寒明けの猩々緋なる陣羽織
米寿なる女五右衛門初芝

中 貞子

初東雲の生駒連山染めにける
羊羹と臘梅のある景色かな
健やかに暮してをりぬ屠蘇の盃
幾年を若葉摘みける小笊かな
草石蚕や地中に古代ありにける

中田禎子

青空や社旗共々に初国旗
初買は錦市場の鯉節
初鴉の哄笑響く朝かな
寒梅や只今茶店建立中
幹に貌あり一輪の寒紅梅

中野京子

能舞台めぐる水面の初景色
大空に綿雲すわり藪柑子
裸木の下に散りたり目のうろこ
赤牛のやさしき眼冬たんぽぽ
粥柱紆余曲折をぬけて海

槐集

高橋将夫選

河豚鍋や黄金の海の波の音 枚方 近藤きくえ

木綿垂ゆうしでにかすかなる風淑気満つ

ひもろぎのむらさき刷ける初茜

白波の光巻きこみ春近し

電子辞書まさぐつてをるちやんちやんこ

初春の金のむかでと毘沙門天

絵馬堂に明治のポンプ梅つぼむ

切山椒逆さ伊吹の見えし池

紀の川に沿うてゆきけり恵方詣

猪汁の振舞ありし宮の杜

生涯のかてとしきたり鏡餅 福井 久津見風牛

若水の月をゆらして運ばるる

風花のひとひら眉を飾りけり

盆梅と言へど山水景をなす

かいつぶり魴の片方のはづくるひ

公案をひつくり返す去年今年 東京 西村 純太

蹠の双手を染める初茜

寒柝の余韻いのちの温みかな

心身や吾に空華の雪一片

鳥葬の終るや太古の寒夕焼

年酒酌む地縁血縁海の風 摂津 中田 禎子

貝焼や大きく見ゆる北斗星

風花や若草色の懐紙入れ

冬夕 日石膏像の表裏

掌につつむ臘梅溶けてしまひけり

月の海へ千石船の嫁が君 枚方 富松 寛子

月面を昇る地球の淑気かな

千年紀若菜の水の流れけり

星鮫の干されてゐたり神の風

五日はや存在論をいきいきと

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

河豚鍋や黄金の海の波の音 近藤きくえ
夕日で金色に染まる海。一切の雑念を包み込む波音。くつぐつと煮える河豚鍋の前に、海原の大景が浮かびあがる。荘厳な色彩と音響の世界が広がる。俳諧。

〈近藤きくえ秀句紹介一十五周年記念作品より〉

湯 上りの 齒の 美しき 冷奴 きくえ
涼しさの 黒糖の 香の 外郎かな 〃

初春の金のむかでと毘沙門天 谷村 幸子
毘沙門天は四天王の一尊に数えられる武神。密教では十二天の一尊で夜叉、羅刹といった鬼神を支配し北方を守護するとされるが、インドでは武神でなく財宝神とされている。そして、百足は軍神毘沙門天の使いとされている。また、百足は足が多いことから、千客万来、商売繁盛の縁起物とされている。それとはともかく、金の百足である。初春である。まことにめでたい限り。ちなみに、上杉謙信は自身を毘沙門天の生まれ変わりと称したといわれる。そして、武田信玄の使番の百足衆の旗指物は百足であった。

若水の月をゆらして運ばるる 久津見風牛
未だ月明かりの元日の明け方。映っている月をゆらさないようにそっと若水を汲んだが、運ぶ段になると水に映る月はおかましく揺れてしまう。揺れる月を見ながら若水を運んで行くという風流な景。

寒栢の余韻いのちの温みかな 西村 純太
寒栢(かんたく)は冬の夜寒に打ちならす拍子木の音。その鋭く澄んだ音色の後の余韻に命の温みを感じたという作者の精神の有り様に共鳴した。

貝焼や大きく見ゆる北斗星 中田 禎子
貝焼は大きい帆立貝の殻を鍋代りにして、魚や鶏肉に季節の野菜なども交えてすき焼をすること。貝殻の上で進行する調理、人の生きがための営みと、冬空に輝く北斗七星の冷徹な輝きの対比が鮮やか。生とエロスの世界。

月の海へ千石船の嫁が君 富松 寛子
「嫁が君」が千石船で「月の海」を渡るといふ。正月にふさわしい、めでたい話である。「嫁が君」は正月三が日に鼠を呼ぶ忌み名。鼠や荒涼としたクレーターなどの月面のあばたの世界が一転してメルヘンの世界になった。

待春の波は躁鬱くり返し 岩月優美子
春の海は蕪村によればへひねもすのたりのたりかな」となる。そして、作者によれば冬も終りの頃の波は躁鬱の繰り返している。人間誰しも程度の差こそあれ気分が高揚している時と、ふさいでいる時がある。そんな気分の振幅の中で春はたしかに近づいてくる。

しゃぼん玉現世まるく写しけり 近藤 公子
現世はしゃぼん玉のように夢・幻のはかない存在。しかし本句は現世を持ち出してはいるが、無常観を振りかざしてはいない。はかない現世でも、しゃぼん玉に映れば丸くてめでたい。